自著を語る

『政治と哲学：〈ハイデガーとナチズム〉論争史の一決算』
上巻＆下巻，岩波書店，2002年

中田　光雄

ハイデガーの名は哲学分野以外でも御存じの方は多いだろう。1889年に南独で生まれ，近くの著名大学フライブルクで新旧哲学界の両雄リッケルトとフッサールに師事し，ついで北部マールブルク大学の教壇でその独創的な哲学と独特の名講義によって多くの学生を魅了し，その成果である『存在と時間』（1927年）によって哲学史をいわば反転させ，フライブルク大学に戻ってからは1933年，ナチス政権成立とともに学長となって「政権協力」のかたちをとり，やがて省庁との意見の確執によって辞任し，以後，ナチス官憲監視のもとでこれまた多大の学生を擁する講義を続け，戦後は逆に英米占領軍から一時公職追放となるが，1950年代から特にフランスでその哲学者としての声価が急騰し，世界的に有名となった。しかし，たんに有名になっただけではなく，また実はたんにこの頃から有名になったのでもない。師のリッケルトとフッサールが各々別のかたちでではあれ依然として帰属していた近代の認識論的哲学，つまりデカルトから始まる「私は考える，ゆえに私は存在する」の「私は考える」に力点を置く哲学から，「私は存在する」に力点を移し，哲学のそもそもの出発点である古代ギリシャの存在論を新たなかたちで20世紀に復活させるこの「存在論的転回」によって，今日の「現代哲学」の思考地平を決定的に開き，すでに1930年代からフランスを中心とする若い世代の哲学者たちの共感を得はじめ，哲学以外のさまざまの学的領域にもつぎつぎに発想の転換を出来させ，この哲学としての時代を開闢する独創力と広範な影響力によって，われわれの知る「ハイデガー」の名は裏打ちされている。

だが，世界大に名声が高まるにつれて，戦中の「対ナチス協力」も取り沙汰されるようになった。実のところ，当時のドイツ大学人はいわゆる国家公務員であり，原理的に反ナチ体制主義者は存在

するはずもなく，実際，積極的な支持者も多く，哲学正教授のみに限ってみても，全ドイツ23大学の正教授180名のうち，1933年時点での入党者は約30名であるが，1937年以降は終戦まで約半数90名が正式の党員であり，ハイデガーのケースは特に例外的なものではない。にもかかわらず，ハイデガーの場合のみが特に取り沙汰されるのは，むろんその哲学者としての世界的名声，さらにはその哲学の世界的な影響力，つまりたんなるドイツ問題に密閉しえない，そのほかならぬメリットゆえと見なければならない。

この「ハイデガーとナチズム」問題は，我が国では1987年のフランスでのベストセラーの余波を承けて87～88年に論題となったが，すくなくとも表面上は一過的なものに止まった。しかし，われわれより若い世代の特に西欧思想研究者にはこの種の問題は重く受け留められるようになってきており，翻って世界の論壇・研究界をみれば，これはなんと1930年から今日まで70年以上，多少の起伏はあれ，世界的に著名な思想家たちの大部分をも巻き込んでの，延々たる考察と論争の連続である。20世紀を代表する哲学思想と，これまた20世紀を代表する未曾有の政治・軍事スキャンダルの相関ということになれば，巨大な文明の転換期としての現代を生きる広義の思索人の意識に，この問題にどう対処するかは一個の不可避の試金石と

して突き付けられてくること必須であるから，これも当然といわなければならない。

ここに紹介・解題の機会を与えられた拙著は，もともと87年事態への対応のために発意され，結局，この過去70年の論争史の全体を総括・補填・刷新し，正道に定位させる試みとして成ったものである。論の主題は「ハイデガーとナチズム」に焦点を絞っているが，真意においては二十世紀論，二十世紀がその典型的な表出のひとつである世界史と文明史の動向への問いといってもよい。十年を超える思考を3800枚の文言によって造形したこの著を簡単に要約することはむろんできないが，ポイントはとりあえず三点ある。(1) これまでの関係諸論稿を適宜恣意的に取捨選択可能な資料として軽んずることなく，二十世紀の中軸を構成する重要な人間思惟の葛藤のコングロマリットつまり論争史として主題化すること。本著はその基礎作業として論争史を構成する主に独・仏・米・英の大小ほぼ全ての三百余論稿を逐一入念に検討する策を採った。このことはたんに研究作業の拙劣さを露呈しているだけのことのように見えるかもしれないが，二十世紀というこの苛烈な悲劇性を帯びた雄渾な叙事詩をその近代から脱皮して未知の未来へと向かう自己審問の精神性において然るべく把握しなおすためには，不可欠の手続きである。(2) ハイデガー哲学がそれと自覚して存在論や存在思惟である以上，存在概念を可能なかぎり明確にし，それによってハイデガー思惟を構成する全ての主要要素を相互連関的に体系化しつつ，当面の問題を含む全ての問題にアプローチすること。不思議なことにこれまでの関係論稿のほとんどすべてが，この肝心の視角設定を行なっていない。たしかに，ハイデガー自身が，「存在とは何か？」(Was ist das Sein?) と問うてその「何」(Was) の確定をもって回答としてきた従来の哲学を形而上学の虚妄の名のもとに棄却し，「存在とは何か？」の問いそのものから零れ落ちる《ist》から出発して《Sein＝Was》なる回答なき問いの無尽性へと哲学を引き込み，挙げ句の果ては哲学そのものをも棄却する以上，存在概念のハイデガー的規定は原理的に可能ではない。しかし，ハイデガーの60年にわたる「存在への問い」がその存在概念の明確化をめぐって従来の諸哲学よりいかなる進展も示していないとは断言しうるはずもなく，いずれにせよこの存在概念の深みからこそ目下の問題の真意も照射されなければならない。(3) 本著は，こうして，(2) から出発してハイデガー哲学テキストを構築し直し，その政治テキストを一字一句読み解き直し，論争史上のほぼ全ての論稿をも換骨奪胎（？）組み建て直し，ハイデガー思惟と，「ハイデガーとナチズム」問題と，「ハイデガーとナチズム」論争史全体を，古代ギリシャ以来の「政治と哲学」問題系と，やや大仰にいえば約一千万年前に無から存在へと立ち出で，いま改めて種としての無の可能性を前にして存在の脱皮をはかるわれわれ人類の，現在から未来への文明史・世界史の只中に位置づける。具体的には如何ようにか？　上記の通り，簡単に応えるわけにはいかない。ただ，礼儀上，大学同僚としての常識の言葉でこう言ってみることはできる。ハイデガーはナチズムの名においてドイツ・ナショナリズムに「加担」した。ナチズムもまたドイツ・ナショナリズムから生まれ出て，しかしそれを簒奪・奇形化した。ハイデガー思惟がナチズム崩壊後も生き延びて，むしろ逆に大成するのは，旧来の「永遠と普遍」の哲学に抗して「時間と歴史的固有」に賭けたこの存在思惟が，そのドイツ・ナショナリズムの底を脱開してたんなる世界（Welt）ならぬ新たな「世-開」(Welten) への方途（Weg）を孕んでいるからであると。...自分で言うのはどうかと思うが，「しらふ」で言っておけば，本著は世界的レヴェルの力作である。少なくとも，論争史に対する一個の立派な《japanese contribution》である。世評が同じことを言うかどうかは知らない。われわれは自らの渾身の労作をとりあえず具眼の士たちに献ずれば，それでよい。

本学中央図書館には資料渉猟その他で多大の御援助を賜わった。感謝に堪えない。

（なかた・みつお　現代語・現代文化学系教授）